

キリストの光のキリスト

年間第23主日 9月6日

(マルコ7・31-37)

初めてミサに参加した方や、教会を訪れた方からよく聞かれる。信者の方はみんな聖書を読まれるのでしょ。聖書をよく知っているでしょ。

はい、とは即答できない。たいていの場合、そうでもないですよ、と答えてしまう。事実だと思ふ。そう答えると、聞いた方は不思議そうな表情をされる。そうなんですか、と言いながら。

司祭の説教が話題にされる。分かりやすいとか、分かりにくいとか。面白いとか、面白くないとか。しかし、「みことば」が話題にされることはそれほどないように思える。

キリスト教の一派といわれているある宗教団体の方とよく

これしかない

話をする。ミサにも参加する。その方が言う。雰囲気だけで言うのは失礼かもしれないけど、みことばを聞く人に、みことばが染み込んでいつてるような気がしない。神を心から賛美しているようには思えない。

わたしもそれに似たような気持ちをもつこともある。

イエスの教え、ことば、行動が人から人に伝えられ、書き留められて今に伝えられている。それが聖書としてわたしたちの手元にある。一字一句がイエスの言葉そのものではないにしろ、人々は時として命を懸けてそれを伝えてきた。イエスの教えを「みことば」と呼び、神のことばと呼ぶ。みことばを聞き、それに

ふれた人は力を得る。生きる力を。生き抜く力を。

まねにイエスの言葉そのものが、言葉の「音」そのものが伝えられている。たとえば「エッファアタ」という言葉。「エッファ



タ」という音。この言葉には特別に力があるように思う。イエスが発した「音」そのものだから。それは「開け」という意味。耳が聞こえず舌の回らない人の両耳にイエスは指を差し

入れ、それからつばをつけてその舌に触れられる。そして天を仰いで深く息をつき、その人に向かつて言った言葉、それが「エッファアタ」。その出来事を目をつぶってじつくりとイメージする。「エッファアタ」とつぶやいてみる。すると、あの出来事がこのわたしにも起こるような気がする。

今、人は言葉を求めている。言葉に飢えている。書店に行ってみると新刊が山積みになされている。その中に必ず「言葉」の本がある。その多くは短い言葉を集めたもの。簡単に読めて、しかも何かの力を与える言葉。そのような本が人気があるようだ。

あるおばあちゃんのところに行った時、ちやぶ台の上に聖書が開かれて置かれていた。ばあちゃん、聖書を読んでいるんですか、と尋ねた。「よーわからんけど、神さまのことばじゃからね。力が出つとよ。読むもんは、これしかない」この言葉は忘れられない。

(山元眞—福岡教区司祭／カット—高崎紀子)

今週の福音

7日・月ルカ	6・6—11
8日・火マタイ	1・1—16、18—23
または 1・18—23	
9日・水ルカ	6・20—26
10日・木ルカ	6・27—38
11日・金ルカ	6・39—42
12日・土ルカ	6・43—49